

レオンハルト・ラガツ―生涯と思想

飯 峯 明

一

レオンハルト・ラガツ (Leonhard Ragaz, 1868-1945) の名は、今世紀初頭におけるスイス宗教社会主義の指導者として、我が国でもよく知られているが、一九二〇年代以降は新しい神学の潮流の中で殆ど忘れ去られている。少くとも彼が一九四五年に至るまで、いわば特異な思想家また実践家としてその活動を続けたということ、否、十五年前まで生きていたということさえ知る人は少いであろうし、ましてその生涯・道程に関心や注意を払う人は今日一層稀であろう。しかし彼が肯定的にも否定的にも現代の神学に与えた影響のあることを思えば、彼の存在を二十世紀における神学思想史の一面面として捉えてみることは、神学と教会の、更にその流れを理解するためにも意味あることだと思ふ。

ラガツが現代神学の主流から離れてしまったことは、勿論彼の思想の特異性とその限界によることでもあるが、今一つには彼の人間としての特異性のしからしむるところであつた。彼の生涯とその行動は余りにラディカルであつた為、多くのスイス人やまた当時のキリスト教会、神学者の受け入れ得ないものとなり、更にこのことがまた一層彼をして闘争的にさせ、人々から孤立させるに至つた。そしてそれだけに彼に対する非難も評価も、余りに直接的な、時代的制約

を帯びたものとなり、彼の思想行動を論ずることを困難にしてきたのであったが、死後十五年を経た今日、漸くラガツを客観的に評価しうる一定の距離と地点が与えられていると言うことができよう。一九五七年に至って同時にラガツに関する二種類の研究書が公刊されたことも、このことを物語っている。⁽²⁾ここでは、これらの優れた研究書や彼自身の著作によつて、その生涯と人間像を捉えつつ、ラガツの思想を簡明に紹介したい。

尤も彼の著作の多くは、その時々々の直面した問題を取り上げたものが多く、四十年にわたつて、彼が主宰した月刊誌 *Neue Wege* も、そこに書かれた評論の多くは時代的制約をもつており、直接に今日の神学的問題とはなり得ないものが多い。このことは他面、彼の鋭いジャーナリスティックな感覚を示すことでもあり、例えば彼の最後の著作である *Die Geschichte der Sache Christi*, 1945 には、彼が序文を書いた日の二週間前の事件である広島原爆投下について一言触れられているのである。しかしそれにも拘わらず、彼の生涯全体が提起した問題は、彼の死をもつて終つたものではなく、今後の神学の歩みの為にも反省さるべきものを持つており、今日正しい評価と批判が下されなければならぬ。このような歴史的関心からも、まず彼の思想が生きていた時代の歴史的状況を、彼の生涯の系譜を通して把握する必要があるうし、それによつてまた彼の思想的な発展と方向とをも理解することができよう。その発展にはいくつかの段階が明瞭に見られるのであるが、ここでは生涯の歴史的な叙述に重点をおきつつ進めてゆきたい。資料としては歿後出版せられた彼の自叙伝⁽³⁾と前記二冊の研究書が用いられた。

二

ラガツは一八六八年七月二十八日スイスのカントン・グラウビュンデン (Kt. Graubünden) のタミンス (Tamins) の農家に生まれた。彼が頑固とまで思われる確い信念と独立心をもった人物であることは、彼が同カントンの出身者であ

ることに関係があるといわれる。また自伝の中にも述べているように、彼が共有財を持ち共同経営を行っていたタミンスの村に育ったことは、彼の後の政治的な考え方を決定し、組合的な社会主義に入らせる基盤となった。スイス人一般がそうでもあるが、彼が社会主義者としても国家権力に対する不信や、また地方分権的連邦主義的な考え方を抱いたことは、この少年時代の印象と深いつながりをもっている。同カントンの主都クール (Chur) のカントン立高校を了えて、一八八六年、バーゼル、エーナ、ベルリーンの各大学で神学を修める。最初バーゼルではオーファベク (Franz Overbeck, 1837-1905) やブルクハルト (Jakob Burckhardt, 1817-97) から学んで歴史学的関心を充たしたが、神学的にはエーナのリプシウス (Richard Adalbert Lipsius, 1830-92) やニホルト (Friedrich Nippold, 1838-1918) の自由主義神学の影響をうけ、またベルリンではプフライデラー (Otto Pfeiderer, 1839-1908) やディルタイ (Wilhelm Dilthey, 1833-1911) から学んでいる。しかし同時に当時拾頭しつつあったリッachelとその学派、またローテ (Richard Rothe, 1799-1867) の思想にも触れることによって、既に不満を抱きつつあった自由主義神学からの脱皮が準備されている。ここでこれらの名前を列挙したのは、ラガツが置かれていた当時の神学的精神的状況が知られるからである。

一八九〇年三月、彼は故郷に近い山岳地帯のフレールデン、ウルマイン、チャピーナ (Flerden, Urmain, Tschappina) の三村の教会を兼牧する。この時期には牧会の傍ら勉強にいそしみ、カント、ヘーゲル等のドイツ観念論とその影響をうけた近代神学を研究しつつ、同時に歴史的批判的神学によって破壊された聖書の統一的理解を得ようと、その研究に没頭する。この牧師時代の終りに、彼ははじめてキェルケゴールの思想に接するが、その大胆な教会批判が彼に深い感銘を与える。

一八九三年九月、クールのカントン立高校の宗教教師となり、ついで一八九五年六月、クールの市附牧師となる。この時期に彼は、カーライル (Thomas Carlyle, 1795-1881) キングズレー (Charles Kingsley, 1819-75) ロバートス

基督教研究 第三十二卷・第三号

ン (Frederic William Robertson, 1816-53) 等の英国キリスト教社会主義の立場や、ゴチウス (Albert Bitzius, 1835-82. 彼はスイスの有名な作家エレミアス・ゴットヘルフの子) やカンブリ (Conrad Wilhelm Kampli, 1829-1914) 等スイスの革進的な牧師に影響せられて、社会問題への関心が次第に強くなる。しかしここではまだ彼のカント的イデオリスムスによつて理解されたキリスト教を、時代のあらゆる問題への解答として提示することが、彼の中心課題となつており、倫理問題に関する多くの著作によつてスイス全土に知られるようになる。またこの時期に社会問題の観点から一種の禁酒運動を行い、与論に反して成功をおさめたことから、社会の多数意見との闘争に自信をもつようになる。

三

一九〇一年十月、彼は Clara Nadig と結婚し、翌一九〇二年一月、バーゼルのミユンスターの自由派牧師に選ばれた。この時期に彼はマルクスの資本論を研究し、キエルケゴールとトルストイ、カーライルとマルクスが彼の中に統一的に並存され、彼の後の生涯や行動の決定的な立場がバーゼルにおいて形成される。彼は、資本主義・帝国主義・軍国主義だけでなく、教会・キリスト教・宗教をも含めた「この世」(アイオーン・ウートス)への対立としての「地上における神の国」の希望をもつに至り、この神の国への信仰が、聖書とキリストの Sache の核心をなすものであるという信念をもつ。これは神からの直接的啓示によるものと彼は考えたが、ともかくこのような体験に力あつたものは当時の労働運動との出会いであり、彼は教会的キリスト教や倫理的に腐敗したブルジョアジーに失望しつつ、労働階級の新鮮且つ健康な力に将来への希望を見出したと感じた。またこの体験と結合していたのは、チューリヒの牧師クター (Hermann Kutter, 1869-1931) の初期の社会主義的著作⁽⁴⁾から受けた印象であつたことは疑いを入れない。クターはマルクスの神なき社会主義の中に生ける神の働きを見るといふ歴史観を述べていたのである。一九〇五年彼はベルン大学の教

授として招かれるが断わっている。

一九〇六年九月バーゼルで開かれたスイス牧師年会で「福音と現代の社会闘争」(Das Evangelium und der soziale Kampf der Gegenwart)という講演をする。ここで彼は社会主義が神の救済史の中に位置を占めるとし、イエスの使信の社会的指針こそがその本来的中心的なものと考えた。更にラガツはこれをクターのように人々の良心に訴えるだけでは満足せず、自ら実践しようと決意する。同年秋以来、彼は *Neue Wege* という月刊機関誌を発行し、当時の若い牧師や神学生たちの大部分が、この運動の影響を受けるに至る。彼は一九〇六年がスイス宗教社会主義運動の生まれた年であるとしている。一九〇七年にはポストンで開かれた自由主義キリスト教世界大会に招かれて、短期間アメリカへ旅行しているが、既に当時の自由主義神学とは明確に思想を異にしていたとみるべきであろう。

一九〇八年、ラガツはチューリヒ大学の組織神学及び実践神学の正教授として迎えられる。この時期には、カルヴァン、ツヴィングリ等の改革者の研究によって神学的に自己を深めつつ、他方ヴィネー (Alexandre Vinet, 1797-1847) やベルグソンの思想的影響をも受けている。しかしこの当時の彼の思想に最大の影響を与えたのは、一九〇九年バー・ボルにおけるクリストフ・ブルームハルト (Christoph Blumhardt, 1842-1919) との出会いであり、その思想は第一次世界大戦前後を通じて益々重要度を増した。彼の著 *Der Kampf um das Reich Gottes, in Blumhardt, Vater und Sohn—und weiter*. 1922, 25 はこの間の消息が明らかであり、彼自らブルームハルトの正しい後継者乃至完成者をもって任じている。勿論彼がブルームハルトを果して正しく解釈したか否かは別問題である。

一九一二年七月、就業時間短縮の要求に端を発したチューリヒのゼネストとこれに対する資本家官憲の圧迫という事件は、ラガツに深い感銘を与え、彼がゼネストを賛同援護したことは、尙一部の富裕階級におけるラガツへの信頼を全く断たせるに至った。ついで一九一三年、彼は社会民主党に入党する。

一九一四年春、彼は英国を訪れるが、つづいて第一次世界大戦が勃発し、彼は特に力の政策に反対しつつ、スイス及びスイス国民の平和的責任を高調する。一九一八年には全欧州に革命の嵐が吹き、当時スイスでもレーニン、トロツキ、ジノヴィエフ等が活動していたが、社会民主主義に対するボリシエヴィズムの脅威を見てこれと対決し、当時のデマゴギッシュな労働運動の在り方に対しても批判的立場をとり、更に戦後は米大統領ウイルソンやその主唱する国際聯盟に賛同するなど、極左労働運動から離れていった。

四

一九二一年、彼は自らチューリヒ大学教授の地位を放棄する。(一九二四年以後この地位を継ぐのがエーミル・ブルンナーである。)[「暴力」を排し、「精神」を重んじつつ、しかも労働者と共に歩もうとする彼は、国立大学教授として確実な収入と地位をもち、かつ国家と教会に在来の結合関係を持ちつづけることを不可能なことを考えた。つまり神学教授職の放棄によつて、これまでの神学や国家と結びついた教会の在り方を否定し、全く新しい、非教會的な仕方での神の国に仕え、キリストに追従すべきであるということを明示しようとしたのである。しかし既に五十三才であり、資産もなく、また二人の子供が在学中であり、このことは極めて困難であつた。しかも彼は、自らの「意志」によつて決断し、かつこのことを神の「強制」として受け取つた。

こうしてラガツは国民教育や社会民主党での活動や、国際平和主義の滲透をはかつて行動し、それが又多くの問題との対決を彼に迫り、機関誌を通して著述活動にも力を入れる。しかしこの時期には、宗教社会主義運動(5)のものにおいても分裂と崩壊がはじまる。その原因は、クターとラガツとの思想的相違や人間的な争いにもよるが、何よりも戦後抬頭して来る新しい所謂弁証法神学によつてである。こうしてラガツの周辺に止まるのは、極く少数の群となる。既に

教授在職中、倫理学、宗教哲学、教義学、その他社会問題、宗教々育学等の講義を行っており、その主なものは三回にわたつてなされ、その都度修正されているが、これらの純神学的な研究は戦争と退職によつて遂に公刊されなかった。

そこでは彼の思想も「神の国」から「イエス・キリスト」へ、即ち、歴史と世界への神の受肉が福音の中心であり、その意味での「この世的なキリスト教」(Welliches Christentum)の主張へと變つてきており、従つてこれらの講義内容が公刊されなかったことは、初期弁証法神学にみられる社会的倫理的行動からの後退とその意味での反動性を特に強く感じたラガツにとつては、極めて残念なことであつた。⁽⁶⁾ また分裂した宗教社会主義の統一のためにも努力するが、それ自体の勢力が弱化した時期においては、もはや大きい効果も得られなかった。

一方ドイツでは一九三三年ヒトラーが政権を握り、三四年総統就任、三五年ザールのドイツ復帰、三六年のラインラント進駐という事態がおこり、また三四年にはバルト神学に指導せられた告白教会のバルメン宣言がなされて、ドイツにおける教会の抵抗運動がおこってくるが、スイスにおいても一九三六年、このような緊迫した国際情勢に应じて、社会民主党がスイスの自衛に積極的な立場を決定するに至り、これに反対したラガツは同党を離脱する。こうして彼は益々少数者への道を辿る。しかしこの第三帝国の時代は、国際平和主義に大きい危機をもたらしたのであつて、ラガツ自身も、無抵抗主義の原理を徹底的に貫ねくべきか、またヒトラーの脅威に対して軍事力による防衛が許さるべきものであるかどうかで、デレンマに立たされる。彼自らナチズムの本質を最初から見抜き、これと戦つてきたために、このデレンマからの解決を遂に見出すことができなかった。

第二次大戦中は、彼の機関誌も常に検閲による困難な闘争を経験したが、ともかく彼は第三帝国の終焉と第二次大戦の終結を自らその目で見ることができた。この戦時中の晩年は、彼が専ら聖書の理解にとりくんだ時期で、またそこから歴史解釈を試みた。彼の晩年の著作、*Die Botschaft vom Reiche Gottes. Ein Kathetismus für Erwachsene*,

基督教研究 第三十二卷・第三号

1942; Die Revolution der Bibel. Die zehn Gebote, 1943; Die Gleichnisse Jesu, 1944; Die Bergpredigt Jesu, 1945 及び先に挙げた遺著、更に死後出版せられた七卷にわたる聖書解説 Die Bibel—eine Deutung: I. Die Urgeschichte, 1947; II. Moses, 1947; III. Die Geschichte Israels, 1948; IV. Die Propheten, 1949; V. Jesus, 1949; VI. Die Apostel, 1950; VII. Johannes, 1950 はこの間の消息と思想を示しており、とくにこれらの著作は、ラガツに対する新しい注目をよびおこした。⁽⁷⁾

一九四五年十二月六日、ラガツはチューリヒでその生涯を閉じたのである。

五

以上、十九世紀の終りから二十世紀の前半にかけての変動期を、自ら信ずるところに忠実に歩んできたラガツの生涯を概観したのであるが、その思想・業績はどのような意味をもっているであろうか。それは、次の三点において評価することができる。

第一にラガツと宗教社会主義から生れた作用の最も大きいものは、それによつてキリスト教徒の社会的及び政治的責任の意識が遙かに強くなったことである。今日では大多数の人々が、福音の宣教が同時に国家と経済生活更に、正義・自由・平和等の問題に関わるべきであると考えているが、この点は少くともスイスに於ては、やはりラガツとその運動が及ぼした影響であるといつても過言ではない。しかしラガツにとつては、キリスト者が社会的正義への責任を一般的に負うことをすすめるよりも、むしろこの責任から社会と政治の具体的な問題に、実践的に関与することに最大の関心があった。従つて自ら社会主義の立場に身を置いた。しかし同時に、この社会主義が正しい内容と正しい形態を備える

為に努力することが、彼自らに課せられた特別な使命であると彼は考えた。ということとは彼にとっては、単なるマルキシズムとは異なる倫理的、宗教的に基礎づけられた社会主義を形成することであつた。

又、私有財産・労働・経済秩序等に関してキリスト者が如何なる理解を持つべきかについて、ラガツは教えるところが多い。更に彼の資本主義や国家権力集中化乃至国有化への否定や、協同組合的経済型態への賛同等も、更に又、平和に対する責任意識を高調したことも学び得る点である。戦争や戦争宿命論への戦いは、もとよりラガツの辿つた道とは異なる道もあり得るが、彼の経験や彼の失望の中に、今日も学ぶべきものが存するといえよう。

第二の点はラガツの神学思想の特殊な性格に関して考えられる。その性格の中心的なものは、歴史における神の継続的啓示の信仰である。これは、十九世紀において広く決定的であつた神学的哲學的思想の傾向や伝統を彼が承け継ぎつつ、彼の倫理的宗教的目標において更に徹底化と発展とを是れはかつたものと言いうる。ラガツにとつて、歴史は過去・現在・未来にわたつて全て神の啓示に充ちたものであり、更にこの歴史における神の支配は、隠されたものでなく明白にして確定し得るものである。彼によれば、神はまさしくこの歴史においてその存在を示すのであり、聖書の歴史は救済史の一部分にすぎず、凡ての歴史は神の歴史である。凡ての歴史から神の計画・意志・存在を読みとることが出来る。もとより聖書の歴史はその範例を示すが、そこに生起した事柄は、世界史のうちに常に新しく継続されており、キリストの生誕と復活はそこにくりかえし行われている。歴史は神の国が実現され神の行為と働きが明らかになっているドラマである。

かくしてラガツは絶えず歴史に訴え、又時代の歴史をこのような意味に於て解釈する。ここで彼の内歴史的啓示理解の基準となっているものは、彼自身の精神的発展と聖書の使信に対する彼の理解である。彼にとつて民主主義・社会主

義・世界平和の実現や、秩序の改革は同時に生ける神の啓示を意味した。彼はこのような歴史の神学を徹底的に試み、歴史の神学から聖書を解釈し、又歴史の神学の為に聖書を解釈した。そしてまさしくこの点に神学的な批判が下さるべきであろう。即ち、果して歴史や時代の出来事から、そのようにキリスト教信仰と神の約束の実体を証明することが許されるであろうか、という問題、更にかかる歴史觀察の基準の妥当性の問題がそれである。歴史の中で一体如何なる現象が、神の啓示としての質を附与されうるのであるか。実にこの様な仕方では歴史の神学を遂行したもの、即ち特定の歴史の現象や運動を直ちに神の器官乃至啓示の担い手であると宣言したものは、ただに宗教的社會主義のみではなかった。一九三二年に始まるドイツの興隆は、新しいドイツとナチズムを神の啓示・神の器官として解釈し・賞讃するという、神学的時代解釈の宣言を次々ともたらすに至ったのであり、このようなアナログアは、自己の歴史的體驗の中に生ける神を経験し確定せんと欲する凡ての歴史の神学のもつ問題性を明らかに示すものといつてよいであろう。

第三はラガツの教会観に關して言ひうる。ラガツは自ら徹底的プロテスタントとして、宗教改革の道を首尾一貫して進もうと考えた。彼は一切の教會的形式や伝統から自由な、純世界的・此世的なキリスト教の立場をとろうとした。彼は、伝統的意味での教會の時代は全く過ぎ去り、近代の世俗化こそ福音の根源的な意味に相應しいものであると考え、更に教會が解消して新しいこの世的な生活形式、共同体形式が成立することにこそ、神の國の完成があると考えた。しかもこの教會からこの世への道を理論的に肯定する丈ではなく、自らの生涯を通して實際に証示しようとした。彼の労働運動への参加、教授職の放棄、政治的闘争への関与、民衆教育の働き、これらのことは凡てこの点から理解されうる。ラガツは、キリストの霊と御國がこの世俗的世界に充たされる新しい道を、自ら歩もうと欲した。この彼の希望は必ずしも果たされなかったが、彼の働いた全領域において多大の刺戟を与えた。彼の最大の関心は、キリストと神の國へ

の信仰が何等かの精神的な殻の中にそれ自らで生くべきものでなく、この世への責任に於てその力を現わすことであり、この関心は今日でも失われぬ意味をもっている。

しかしラガツが、教会とその現代に於ける存在理由を徹底的に否定したことは、やはり早見にすぎるといふべきである。この点では彼は実は調停神学者ローテの教会観を引き継ぎつつ、他方ではそれと全く異質の、また全く異つたモチーフから生れたキエルケゴール・トルストイ・ブルームハルト等の教会批判が自己の立場を裏付けけるものと感じていたこと、即ち、教会の問題を新約聖書からではなく、一九世紀における肯定と否定の立場から捉えたのであつて、この点ラガツの限界は余りにも明白であるといわねばならない。

ラガツは尙、彼の祖国に対して予言者的な意識をもつてのぞんだ。彼はスイス国民から多くのものを期待し要求した。とくに現代世界における永世中立国スイスの使命を語った。その調子は、あたかも旧約の予言者が神の選民に語るが如くであつた。そしてこの要求によつて、彼は反つてスイスで孤立するものとなつた。彼の語つたところに多くの問題があり、又批判が加えらるべきであるにしても、しかも彼は聖書の真理について当時の人々が忘れていた点を多く語つた。ブルジョア的キリスト教に対し、福音に於ては一切の価値の变革、新しい世界、神の国が問題であることを語り、信仰が彼岸の事柄や個人の魂のみの問題でなく、この世に於ける、又この世に対する責任をもつものであるとの意識を喚起した。

要するにラガツの生涯と業績は、神の国が人間生活の最も世俗的な領域にまで滲透し改革せんがために、世界と歴史の中に突入していることを、すべて証示しようとするものであつた。そしてこのような彼の実践の道程に対しては、思

基督教研究 第三十二卷・第三号

想を異にするものと雖も、敬意を払わざるをえないであろう。またラガツの思想を神学史的に見れば、自由主義神学から福音主義神学への移行の中間過程に位置するものと言うことができよう。自らはその立場に身を置くことができなかったが、多くの点で肯定的にも否定的にも福音主義へのより直接的な道備えをしていたと言えるのである。しかもキリスト教倫理学の歴史においては、一新時期を劃する新しい道標をうち建てたものと言わなければならない。

(本稿は一九六〇年四月日本基督教学会近畿支部会における発表に手を加えたものである。尚チューリヒの Dr. Jakob Ragaz と Prof. Dr. Arthur Rich が与えられた厚意に対し、この場をかりて深甚の感謝をささげたい。)

一九六一・七・二〇

(1) バルトやブルンナーがラガツの弟子であったことは既によく知られている。彼等は『ラガツにもかかわらず』(バルト) 新らしい道を開拓したのであったが、ブルンナーも教義学第三巻の序文に述べているように、彼の思想に最も大きい影響を与えたのは、結局 C・ブルームバルトとラガツであった。彼の教会観は恐らくラガツなしには考えられないのではなからうか。

(2) Andreas Lindt: Leonhard Ragaz. Eine Studie zur Geschichte und Theologie des religiösen Sozialismus. Zürich, 1957. 284S.

Markus Mattmüller: Leonhard Ragaz und der religiöse Sozialismus. Eine Biographie. Bd. I: Die Entwicklung der Persönlichkeit und des Werkes bis ins Jahr 1913. Zürich, 1957. 248S. (本書は同様に Basler Beiträge zur Geschichtswissenschaft の六

十七巻としてバーゼルからも出版されている)

前者の著者リントは牧師であり、未刊日記や書簡をも参照しつつ、全体として、より神学的、教会史的な取扱いをしており、後者の著者は歴史家で、日記書簡の他、講義草稿をはじめ現在入手しうる凡ての資料を参照してより歴史的な取扱いをしている。序論として英独のキリスト教社会運動やスイスの教会と労働問題に關しての要領のよい解説がある。第二巻の出版が待たれる研究である。

(3) L. R.: Mein Weg, hrsg. v. Clara Ragaz. 2 Bde. Zürich, 1952. 及び Meine geistige Entwicklung (In: Mattmüller, op. cit. S. 240-246) の短文は一九二一

—三〇年頃に書かれたものといわれ、同書にはじめて公刊された。

(4) Das Unmittelbare. Eine Menschheitsfrage. Berlin,

1902.

Sie müssen! Ein offenes Wort an die christliche Gesellschaft. Zürich, 1903.

Gerechtigkeit. Ein altes Wort an die moderne Christenheit. Berlin, 1905.

(5) すでに一九一二年のゼネストに対するラガツの態度に、クターは極めて感情的な非難を加えている。

(6) ラガツの弁証法神学に対する批判は、

Von der schweizerischen religiös-sozialen Bewegung zur dialektischen Theologie (In: Reich Gottes—Marxismus—Nationalsozialismus. Ein Bekenntnis religiöser Sozialisten. Hrsg. v. G. Wünsch. 1931)があり、これについて島田啓一郎教授の「キリスト者の社会的行動」(本誌第二十四卷第三・四号)に詳しい論評がある。

(7) ラガツの著作については、

Robert Lejonne : Bibliographie der Werke und Schriften von Leonhard Ragaz. Ⅱ. R. : Gedanken aus vierzig Jahren geistigen Kampfes. (1938) 1952. におめられている。そこにぬけた著作については Mattniller がおぎなっている。

本文にも書名を挙げたが、その他に主要なものを挙げる

Weltreich, Religion und Gottesherrschaft. 2Bde. 1922. (Aufsätze von 1906 bis 1921)

Dein Reich Komme! Predigten. 2Bde. 1922³.

Die Erlösung durch die Liebe. 1922.

Selbstbehauptung und Selbstverleugnung. 1922.

Theosophie oder Reich Gottes? 1922.

Judentum und Christentum. 1922.

Von Christus zu Marx—von Marx zu Christus, 1929.

Die Erneuerung der Schweiz. 1933².

Das Reich und die Nachfolge. Andachten. 1938.

Israel, Judentum, Christentum. 1941.

Zuflucht zu Gott. Gottesdienstliche Gebete. 1956.

その他 Neue Wege の中の主要な論文が戦後も別刷されて出版されている。その中でラガズの思想をよくあらわしているものとしては

Das Glaubensbekenntnis. Zur Bekenntnisfrage.

Reformation nach vorwärts oder nach rückwärts?

Fine Kampschrift. を挙げることができる。